

目次

JIMGA平成31年賀詞交歓会.....1

- ◎ 今井会長挨拶
- ◎ 来賓ご挨拶

会員紹介 ー四国岩谷産業株式会社 坂出工場ー.....2

- ◎ 沿革
- ◎ 坂出工場の特徴
- ◎ 坂出工場の取り組み

大崎クールジェン見学報告.....3

- ◎ 第1段階：「酸素吹石炭ガス化複合発電(酸素吹IGCC)」の大型設備実証試験
- ◎ 第2段階：酸素吹IGCCにCO₂分離・回収設備を付設した「CO₂分離・回収型酸素吹IGCC」の実証試験
- ◎ 第3段階：さらに燃料電池を付設した「CO₂分離・回収型IGFC」の実証試験

EIGA Winter Seminar 2019「医療ガス - 深呼吸 -」参加報告.....5

JIMGAnews創刊50号にあたって.....6

JIMGA平成31年賀詞交歓会



会長挨拶

1月15日、経団連会館でJIMGA平成31年賀詞交歓会を開催し、経済産業省、厚生労働省、高压ガス保安協会など各種関連団体から来賓を迎え、約450名が参集して盛大に行われました。

今井会長挨拶

冒頭、今井会長は挨拶で、昨年相次いだ自然災害について、「会員各社は自らも深刻な被害を受けながらも、医療ガス、産業ガスの供給のために懸命に対応した」として敬意を表しました。そのうえで、「我々の事業は産業的・社会的インフラ

そのもの。医療ガスというライフラインおよび、産業ガスのサプライチェーンが切れることがないように、JIMGAは今後も会員各社と行政の間に立ち、対応する」と述べました。さらに電力料金の問題について、JIMGAが参画する電力多消費産業11団体では、国民負担の抑制と再生エネルギー導入の両立に向けた共同要望書の作成を進めていることに触れ、今後も運動を展開していくと意気込みを示しました。

来賓ご挨拶

続いて来賓の方々からもご挨拶をいただきました。経済産業省井上製造産業局長は、「当業界は回復基調にあり、今後も産業ガスの安定的調達をお願いしたい」と述べたうえで、JIMGAの保安啓発活動や省エネ・温暖化対策等の活動についても、引き続き積極的な取り組みを期待しているとして、政府としても支援していく考えを示しました。

厚生労働省吉田医政局長は、「平成29年9月に医療ガスに関する基本的なルール(96通知)を発出し、これによりJIMGAでは講習会開催、自治体との災害時のネットワーク構築に取り組むとともに、在宅酸素の手引書等の制作も一緒に行ってきた」として、今後も日本の医療インフラについて、共に安心・安全を前進させたいとしました。

高压ガス保安協会(KHK)の市川会長は、「平成の時代には災害が多く発生したが、JIMGAと会員各社は我が国の産業活動、医療の現場を支えてきた」と述べたうえで、次の御代においてもKHKとJIMGAとの連携を今まで以上に強めていきたいと述べました。

来賓ご挨拶に続いて永田副会長が、「日頃から保安、安心、安全ということで産業・医療ガスを供給している当業界が、社会や産業界でより評価いただけるよう、一層の努力をしたい」と乾杯挨拶し、和やかな歓談に入り、鈴木副会長の中締めにより盛況裏に閉会しました。(広報委員会事務局 石原 智子)



会場の様子

会員紹介 ー四国岩谷産業株式会社 坂出工場ー

沿革

四国岩谷産業株式会社 坂出工場は、昭和36年6月に岩谷産業株式会社 坂出工場として開業し、平成17年4月から四国岩谷産業株式会社として、高圧ガスの製造を行ってきました。

開業当初はプロパンガスの製造のみでしたが、設備増設により、今では酸素ガス、窒素ガス、アルゴンガス、炭酸ガス、FCCプロパンの充填も行い、中四国の他、関西方面までガスを配送しています。

また、溶接材料、溶接・切断機、ガス供給機器の販売、メンテナンスなど、高圧ガスの消費に必要なあらゆる商品も取り扱っており、ガスのプロとして四国の産業を支えています。



工場全景

坂出工場の特徴

一つ目は、海に面した立地を生かし、船舶によるFCCプロパンの受入およびLPGタンカーのタンクパーシ作業を行っていることです。タンクパーシ作業とは、タンカーがドックに入る際、タンク内の可燃性残ガスを除去するために一旦窒素ガスで置換することですが、その際に使用する窒素

素ガスを構内のN₂50t CEから供給しています。坂出工場はドックの集中している今治や尾道に近く、設備が整っていることから、タンクパーシの需要が高く、全国でも数少ない拠点として日々活躍しています。



LPGタンカー

二つ目は、ローリ出荷専用タンクとしてCO₂100t CEを保有していることです。夏場は各炭酸ガス製造プラントの定期自主検査が重なり、西日本の炭酸ガス供給が不安定になります。その対策として、坂出工場にて液化炭酸ガスを常時備蓄しローリ出荷に利用することで、中四国地方の炭酸ガスの安定供給に貢献しています。

坂出工場の取り組み

毎年一回、防災訓練を行っています。工場の保安、消火訓練、炊き出しなど、災害時の対応を再確認し、いざという時に備えています。災害による工場の被災を最小限に留めることで、お客様へのガスの安定供給を実現すると共に、災害復旧に強いLPガスを取り扱う企業として、イワタニオリジナルの炊き出しセットで、被災地にいち早く温かい食事を提供する訓練を行っています。

今後もガスを通して、地域に根差した企業であり続けたいと思っています。

(四国岩谷産業株式会社 産業ガス・機械営業部 馬場 千夏)



防災訓練

大崎クールジェン見学報告

JIMGA化学品安全WGでは、平成30年12月に瀬戸内海に浮かぶ広島県大崎上島にある大崎クールジェン株式会社を訪問しました。

大崎クールジェンは、国のクリーンコール政策に則り、革新的低炭素石炭火力発電の実現を目指す目的で、中国電力株式会社(50%)と電源開発株式会社(50%)の共同出資により設立された会社です。

ここでは、究極の高効率発電技術である、石炭ガス化燃料電池複合発電(IGFC)とCO₂分離・回収技術を組み合わせた「革新的低炭素石炭火力発電」の実現を目指したプロジェクトが次の3段階で推進されています。



設備外観

第1段階:「酸素吹石炭ガス化複合発電(酸素吹IGCC)」の大型設備実証試験

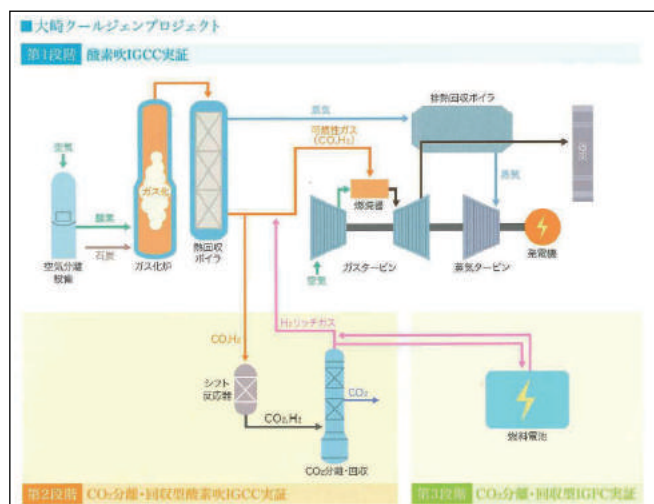
IGCCは質の悪い石炭(低品位炭)が使用できます。インドネシアより輸入した低品位炭をガス化して、ガスタービンと蒸気タービンで発電する実証試験が行われ、出力16万6千kWで40.8%のエネルギー効率が実現されました。このときの酸素使用量は2万数千Nm³/hとなります。ガス化工程で排出されるガラス化されたスラグは、セメントの材料や路面材などに利用されます。

第2段階:酸素吹IGCCにCO₂分離・回収設備を付設した「CO₂分離・回収型酸素吹IGCC」の実証試験

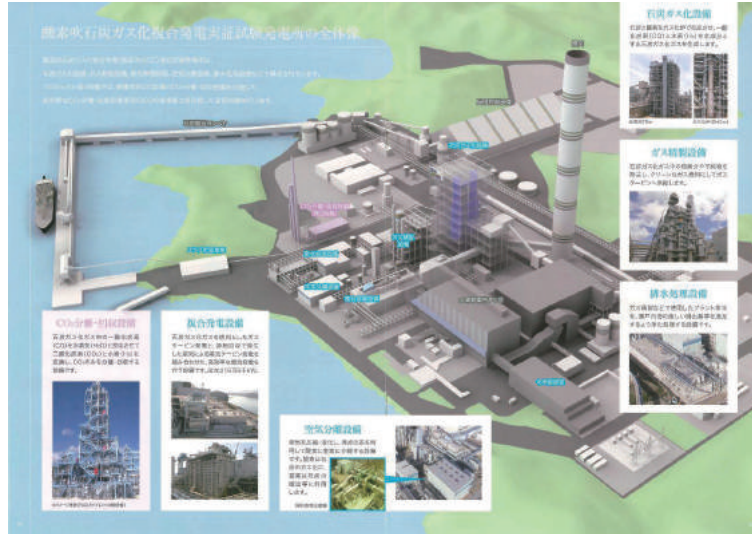
第2段階の実証試験は、2019年後半から2020年にかけて実施される予定です。CO₂排出量は400t/日で、ガス化で発生するガスの約15%に相当するCO₂を回収効率90%以上で回収し、純度99%以上のCO₂を得ることが目標です。

第3段階:さらに燃料電池を付設した「CO₂分離・回収型IGFC」の実証試験

第3段階では、CO₂を分離した後に残っているH₂を燃料電池に使用する実証試験です。



大崎クールジェンプロジェクトの説明



酸素吹炭ガス化複合発電実証試験発電所の全体像

※図はすべて「大崎クールジェン(株)」パンフレットより

今回の訪問では、第1段階が終了して現在修繕中の大型実証試験設備を見学しました。大崎上島までは陸路がありませんので、フェリーでの上陸となりました。現地では、大崎クールジェンの皆様に丁寧にご説明をしていただきました。

現在の問題点は、コスト、摩耗、腐食であり、また、酸素を得るため、空気分離に10%の電気を使用していることも課題だそうです。

今後、各地にIGCCが展開され商用設備ができれば、酸素消費とCO₂の供給元となり得る可能性がありますので、業界としても注視していきたいと思えます。

(化学品安全WG 事務局 大沼 倫晃)



見学研修の参加者

大崎クールジェン株式会社については下記をご覧ください。
<https://www.osaki-coolgen.jp/>



EIGA Winter Seminar 2019 「医療ガス - 深呼吸 -」 参加報告

2019年1月30日～31日にEIGA主催の冬季セミナー「Medical Gases-A deep breath-：医療ガス-深呼吸-」が、ベルギー・ブリュッセルのラ・プラザ・ホテル・シアターで開催されました。協会メンバーとして、JIMGAより参加しました。

初日は朝から大粒の雪が降っていましたが、参加登録者206名のほとんどが朝から参加しました。2004年開催以来15年ぶりの医療ガス関連のセミナーのためか、熱気を帯びたセミナーになりました。参加国は、ドイツが43名、イタリア27名、フランスとイギリスが20名で、スペインが17名の参加でした。ヨーロッパ以外では、日本1名(JIMGA)、アメリカ3名(CGA)が参加しました。

セミナーは、7つのセッション(①はじめに、②ホームケア、③医療ガス、④医療ガスの将来、⑤医療機器、⑥&⑦トピックス)で構成され、各セッションの最後には質問時間が20分程ありスマートアプリからの質問と会場からの質問を受けて活発な質疑が行われました。

安全に関する講演は少なく、基準・規制に関する講演が目立ちました。特に、医療機器に関しては、EUの規制(MDR：Medical Device Regulation)が2017年より新たな規制に移行し、今後の規制スケジュールについての講演が主題でありました。イギリスがEUを離脱すると、イギリス製の医療機器はMDRの承認を得られなくなるとの議論もありました。

また、EU域内では、ポータブル酸素濃縮器が制限はあるものの多くの航空会社で受け入れ可能になっており、在宅医療機器がたいていの場所で使用できるような体制が整えられています。在宅医療酸素サービス会社ウエストファーレン・メディカルからは、11,000人の患者を、40人のホームケア用運転手が送迎し、20人から成るコールサービスセンターを設け、7か国で対応しているとの講演がありました。ポータブル酸素濃縮器からの吸入をしながら、ジムで運動するような事例も紹介されていました。EUにおいても地震など災害時の対応についての安定供給に関する問題意識が高く、日本の事例を参考にしたいとの発言もありました。

この講演資料の電子データが2月末頃に公開されますので、JIMGA会員の方で、資料の入手希望がありましたら、JIMGA事務局までご連絡ください。(TEL： 03-5425-2420 e-mail：shasaka@jimga.or.jp)



セミナーの様子

ベルギーはこの時期ムール貝が美味しく、これらを少し堪能させていただき、帰国の途につきました。

次回2020年のセミナーは、同じ会場で1月29日～30日に「Lesson learned in production and filling plants」のタイトルで開催されます。

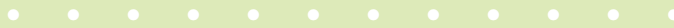
(国際部会 事務局 羽坂 智)

JIMGAnews創刊50号にあたって

JIMGAnews創刊50号おめでとうございます。

この記念すべき号にメッセージを寄稿せよとのお話をいただき、私ごときがと思いついながらも、結局はこうして寄稿させていただくことにいたしました。

「私ごときが」というのは、広報委員長を拝命しているとはいえ、この業界では全くの新参者でして、業界の皆さんの手前、おこがましいと思った次第です。とは言え、こういう人間から見るとどう見えるのかというのも一つの視点であるとお許しいただき、厚かましくも印象を述べさせて、いや、つぶやかせていただきたいと思ひます。



まずは私自身も自問自答してきたことでありますが、JIMGAの広報とは誰に対して何を伝えるべきなのかということをお話しなくてはならないのですが、そんな硬い話は横に置いておき、広報委員長としての悩みをお聞きいただきたいと思ひます。それは広報の重要なミッションの一つである、また普段皆さんがあまりご存じないJIMGA会長記者会見のお話であります。

JIMGA会長記者会見ですので、会長が記者の皆さんに状況説明をし、記者の方々からのご質問に答える場であります。まずは業界を取り巻く環境をご説明するわけですが、そのテーマは業界全体の活動を表す各種データ、そして消費税、電力料金、安全保安、コンプライアンス等の各政策であります。業界全体また会員各社の最大公約数的なテーマとならざるを得ず、結果として毎回同じようなテーマとなります。従って新鮮味を出すことが難しく、また記者の皆さんもツッコミにくいということになります。

記者の方々はおもしろい記事ネタを探しに来られているのですが、現実はそのよういきません。とすると、せめて当日どうやってその場を活気づかせて記事

にしてもらうかが、司会を務めている広報委員長の役割なのですが、これが難しい。

私は、場が停滞しそうな時はこちらから質問を促すべしで指名させていただいておりますが、場が続いている間に、次にどなたに答えていただくかを、記者の方々の雰囲気を一層懸命に観察し狙いを定めていきます。



また事前に用意したテーマ以外の話題もネタ振りすることがありますが、これはぎりぎりストライク狙いの変化球でありまして、もしかすると場違いとおしかりを受けることにもなりますので、ハラハラドキドキであります。まあ、それでもそういう話題が少しでも記者の皆さんに興味を持っていただけるのであれば、今後とも勇気を持って変化球を投げていきたいと思っております。

私としては、会員各社が取り組んでおられる、IoTの活用や外国人雇用も含めた労働問題、水素社会に対する対応、環境問題、業界の存続問題など、業界でいま起こっている現象をJIMGAの目で問いかけていけたらおもしろいと思っており、そういうところを記者の皆さん方に取り上げていただきたいと思っています。

そのためには事前に準備も必要であり大変な作業ですが、実は会員各社ですでに取り組んでおられるので、それらの情報を整理するだけでも十分な情報ネタになります。JIMGAでは各種の記念特集で座談会やトップインタビューなどのイベントがありますが、その時のテーマとして先ほどのテーマが取り上げられることもありますので、その内容の紹介もアリかと思っています。

ここまで言うと、今後の記者会見では何らかの変化を期待され、同時に大きなプレッシャーを自分に課すことになり、ちょっと言い過ぎたかと少し後悔もあります。私の話は若干支離滅裂なところもあり、JIMGAnews創刊50号に寄稿するものとしてはふさわしくないものだと認めるところではありますが、広報委員長というより、極めて私的なつぶやきだご理解賜りましたら幸いです。

JIMGAの今後の発展を願い、広報という立場から記者の皆様、JIMGA会員の皆さまに愛されますよう、今後とも努力してまいりたいと思っております。

(広報委員会 委員長 川本 健一)